氏　　名	BAIERNA TAYIER
学　　位	博士（文学）
学 位 記 番 号	博日甲　第10号
学位授与の日付	2024年３月25日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	コーパスを用いた「ていく」「てくる」「ている」、及び、 その敬語形「ていらっしゃる」に関する研究
論 文 審 査 委 員	主　査　教　授　　澤　田　　淳
	副　査　准教授　　田　中　祐　輔
	副　査　准教授　　大　江　元　貴
	副　査　青山学院大学名誉教授 近　藤　泰　弘

論 文 の 内 容 の 要 旨

BAIERNA TAYIER

従来、日本語の「ている」と「ていく」「てくる」は、それぞれ独立した形で研究が進められてきたが、本研究では、これらが敬語形では「ていらっしゃる」となる点に着目し、これら三者を一つのセットとして分析することを試みた。具体的には、BCCWJコーパスを用いた用例調査とPythonを用いたデータ処理によって、現代日本語の「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」の使用実態について、特に、下記の２点の課題を設定して、調査・分析を行った。

(1) 課題１：「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」は、それぞれ、どのような動詞と結びつきやすいのか。

課題２：一般に、「ていらっしゃる」は、＜テイク＞＜テクル＞＜テイル＞の尊敬語とされるが、実際の使用においてはどうであるのか。

第１章では、本研究の研究背景および目的について述べるとともに、先行研究を概観した。従来の研究では、「ている」と「ていく」「てくる」は独立した形で研究が進められてきたが、本章では、「ていく」「てくる」「ている」が一つのセットをなしており、これら三者を関連づけて研究を行うことによって、新たな知見が得られることが期待され得る点を確認した。また、これらの敬語「ていらっしゃる」については従来詳しい考察はなされていないことから、改めてその使用実態をコーパスを用いて体系的に調査することの必要性について確認した。

第２章では、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』を用いた用例検索の方法と Python 言語を用いた処理の方法を紹介し、本研究の調査方法と分析方法について論じた。ここでは、特に、Python 言語を用いた言語処理の方法については、日本語学の研究においてはまだ十分に浸透していないため、その具体的手順について詳細な説明を行った。

第３章では、第２章で示した研究手法によって得られた BCCWJ 内の「ていく」「てくる」「ている」の用例データについて、主に前接動詞の種類に注目して分析を行った。ここでは、「ていく」「てくる」「ている」それぞれとのみ共起する動詞群が存在し、それぞれの動詞群は、〈離反〉〈接近〉〈状態〉の意味を含んでいる点、後続する「ていく」「てくる」「ている」がそれぞれの動詞群が持つ本来的意味を強化する作用を持つ点などを明らかにした。

第４章では、第２章で示した研究手法によって得られた BCCWJ の内の敬語形「ていらっしゃる」の用例データについて、前項動詞の種類と意味の偏りの観点から考察を行った。前項動詞の種類に着目した場合、〈テイル〉に解釈される「ていらっしゃる」は、幅広い種類の前項動詞と共起しており、特定の動詞群への偏りは特に見られないのに対して、〈テクル〉に解釈される「ていらっしゃる」は、限られた種類の動詞とのみ共起している点を明らかにした。また、本動詞「いらっしゃる」の調査結果も含めた総合的考察を行い、本動詞「いらっしゃる」、補助動詞「ていらっしゃる」は、実際の使用においては、〈（テ）イル〉に解釈される例が最も多く、〈（テ）クル〉に解釈される例が続くが、〈（テ）イク〉に解釈される例は限定されている点を明らかにした。

第５章では、第１章から第４章までの考察をまとめるとともに、本研究で得られた知見、及び、今後の課題を示した。

最後に、本研究の考察で得られた主たる知見を以下に示す。

1．「ていく」とのみ共起する前項動詞として「走り去る」「通り過ぎる」「去る」などが挙げられるが、これらの動詞は、ある対象から《離れる》という意味を含んでおり、「ていく」に似た意味特徴を有する。「てくる」のみと共起する前項動詞として「込み上げる」「湧き上がる」「押し寄せる」などが挙げられるが、これらの動詞は、ある対象に《近づく》意味を含んでおり、「てくる」に似た意味特徴を有する。「ている」のみと共起する前項動詞として「横たわる」「潜む」「困る」などが挙げられるが、これらの動詞は、《状態的な動作》を表しており、その意味で「ている」に似た意味特徴を有する。

2．補助動詞「ていく」「てくる」「てくる」の意味は、動詞の意味にただ単純に付加される　のではなく、動詞の本来持っている意味を強化する作用がある。このことは、「ていく」「てくる」「てくる」等の状態・移動系のアスペクトの性質は、それが接続する動詞との関係が深いという意味において、テンスやモダリティよりもヴォイスに近い性質を持つ。

3．前項動詞の種類に着目した場合、＜テイル＞に解釈される「ていらっしゃる」は、幅広い種類の前項動詞と共起しており、特定の動詞群への偏りは特に見られないのに対して、＜テクル＞に解釈される「ていらっしゃる」は、限られた種類の動詞とのみ共起している（＜テイク＞に解釈される「ていらっしゃる」に前接する動詞はさらに限定される）。「ていらっしゃる」が＜テクル＞に解釈される場合、その前項動詞と後項動詞「いらっしゃる」との関係は、主に、「同時移動」（例：「連れる＋ていらっしゃる」「持つ＋ていらっしゃる」）、「継起移動」（例:「見る＋ていらっしゃる」）「移動の方向づけ」（例:「帰る＋ていらっしゃる」「出る＋ていらっしゃる」「入る＋いらっしゃる」）の３つに集約される。「同時移動」「継起移動」「移動の方向づけ」の３つは、いずれも「空間的移動」の意味が（多かれ少なかれ）保持された用法である点を踏まえれば、＜テクル＞に解釈される「ていらっしゃる」は、基本的に「空間的移動」の意味が保持されており、（非敬語形の「てくる」に比べ）意味の抽象化（文法化）が進んでいないことがわかる。

4．前一般に、「ていらっしゃる」は、〈テイク〉〈テクル〉〈テイル〉の尊敬語とされるが、BCCWJ に現れる補助動詞「ていらっしゃる」では、〈テイル〉に解釈される例が最も多く、次に〈テクル〉に解釈される例が続くが、〈テイク〉に解釈される例はほぼ存在しない。基本的に同様の分布の傾向（意味の偏り）は本動詞「い

らっしゃる」にも認められるが、補助動詞「いらっしゃる」においては、本動詞「いらっしゃる」以上に、意味領域の縮小が進行していると考えられる。すなわち、本動詞形「いらっしゃる」から補助動詞形「ていらっしゃる」へと文法化を逐げ、素材的意味が希薄化したことで、方向性の領域においては、視点制約が強まり、直示性が先鋭化している（すなわち、＜求心的な方向性＞に特化している）可能性が示唆される。

従来、「ていく」「てくる」と「ている」は、それぞれ独立して研究される傾向にあったが、これら３つは、敬語形では「ていらっしゃる」という同一の語形で示されるように、単なる表面上の一致以上のものがある。本研究では、「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」を同一平面上で記述・分析することによって、上記に示したような新たな知見を提示した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

ベリナ・タイル氏より提出された博士学位申請論文「コーパスを用いた「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」に関する研究」は、本論（全５章）、参考文献、及び、付表からなる論文である。

「ている」と「ていく」「てくる」は、日本語のアスペクトやダイクシスの根幹をなす重要な文法現象であり、これまでにも多くの研究が蓄積されてきている。しかしながら、これまでの研究では、一般に、「ている」と「ていく」「てくる」は、独立した形で研究が進められてきており、三者の意味的な関係性や棲み分けについては、ほとんど明らかにされてこなかったと言える。

本論文では、「ている」と「ていく」「てくる」が敬語形ではいずれも「ていらっしゃる」となる点に着目し、これら三者を一つのセット（すなわち、トリオ）として分析することによって、新たな知見を提示することを試みた論文である。具体的には、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）を用いた用例調査と Python 言語を用いたデータ処理によって、現代日本語の「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」の使用実態について、(i)「「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」は、それぞれ、どのような動詞と結びつきやすいのか」(ii)「一般に、「ていらっしゃる」は、＜テイク＞＜テクル＞＜テイル＞の尊敬語とされるが、実際の使用においてはどうであるのか」という

２点の課題設定のもと、調査・分析を行っている。

第１章では、研究の背景と目的を述べると共に、研究史について概観している。ここでは、「ていく」「てくる」「ている」が一つのセットをなしており、これら三者を関連づけて研究を行うことによって、それぞれの表現の意味的な特徴がより明瞭になると共に、これら三者の意味的な棲み分けの原理を抽出することが可能となる点を確認している。また、近年、本動詞「いらっしゃる」が若年層を中心に「行く」の意味での使用が見られなくなってきているとする先行研究での報告を踏まえ、補助動詞「ていらっしゃる」についても同様の意味領域の縮小化が生じているのかという新たな課題が提示されている。

第２章では、BCCWJ を用いた用例検索法と Python 言語を用いたデータ処理法を紹介し、本研究の調査方法と分析方法について論じている。ここでは、現代日本語の代表的コーパスの１つである BCCWJ と、プログラミング言語の１つである Python を併用することによって、上記の課題１、課題２に対して、より実証的な観点からアプローチすることが可能となる点が確認されている。

第３章では、第２章の研究手法から抽出された「ていく」「てくる」「ている」のデータについて、前接動詞の種類に注目して分析を行っている。ここでは、「ていく」、「てくる」、「ている」それぞれにおいて、共起しやすい動詞群が存在し、これらの動詞群は、それぞれ、〈離反〉、〈接近〉、〈状態〉の意味を含んでいる点を明らかにしている。本章では、この事実をもとに、補助動詞「ていく」「てくる」「ている」の意味は、動詞の意味にただ単純に付加されるのではなく、動詞の本来持っている意味を強化する作用があるとする一般化を提示している。さらに、「ていく」「てくる」「ている」等の状態・移動系のアスペクトの性質は、それが接続する動詞との関係が深いという意味において、テンスやモダリティの形式よりもヴォイスの形式に近い性質を持つとする指摘も行っている。これらは、「ていく」「てくる」「ている」をトリオとしてとして分析することによって見えてくる特徴であり、これら三者を一つのセットとして分析するという本論文の問題設定の妥当性の高さを示すものともなっている。

第４章では、第２章の研究手法から抽出された敬語形「ていらっしゃる」について、前項動詞の種類と「ていらっしゃる」の解釈の偏りの２点に注目した考察を行っている。

BCCWJ の用例調査から、前項動詞の種類に関しては、〈テイル〉解釈の「ていらっしゃる」、〈テクル〉解釈の「ていらっしゃる」、〈テイク〉解釈の「ていらっしゃる」

の順に、前項動詞の種類が限定されていく点が示されている。具体的には、〈テイル〉解釈の「ていらっしゃる」では幅広い種類の前節動詞が生起可能である点、〈テクル〉解釈の「ていらっしゃる」では、前項（前項動詞）と後項（「（て）いらっしゃる」）の関係で見た場合、「同時移動」「継起移動」「移動の方向づけ」という空間移動系に集約される点、〈テイク〉解釈の「ていらっしゃる」では生起する前項動詞がほぼ見られない点を明らかにしている。さらに、ここでは、〈テクル〉解釈の「ていらっしゃる」は、「同時移動」「継起移動」「移動の方向づけ」という空間移動系での使用に限定される（非空間移動系では使用されない）点で、非敬語形「てくる」に比べると意味の抽象化（文法化）が進んでいないという重要な観察も示している。

さらに、この第４章では、実際に使用される「ていらっしゃる」において、意味の偏りが認められる点も指摘している。一般に、「ていらっしゃる」は、〈テイク〉〈テクル〉〈テイル〉の尊敬語とされるが、本章では、BCCWJ に現れる「ていらっしゃる」では、先の前項動詞の種類の幅の相違と相関する形で、〈テイル〉解釈の「ていらっしゃる」、〈テクル〉解釈の「ていらっしゃる」、〈テイク〉解釈の「ていらっしゃる」の順に用例数が減少していく点が示されている。補助動詞「ていらっしゃる」においても、意味領域の縮小化が認められる点を示した点で大きな意義が認められる。

第５章では、第１章から第４章までの内容をまとめると共に、本研究で得られた知見、及び、今後の課題を提示している。

このように、本論文は、コーパスを用いた膨大な用例調査と言語処理技術を用いた実証的な分析によって、「ていく」「てくる」「ている」、及び、その敬語形「ていらっしゃる」について新たな知見が示されている。

最終試験である口頭試問では、審査委員から、「ていく」「てくる」「ている」を一つのセットで扱うことの意義についてさらに詳しい論述が必要である点、前項動詞の性質について語彙アスペクトの面からより詳しい分析が求められる点、「ていく」「てくる」「ている」が前項動詞の意味を強化する作用がある点でヴォイスの形式に近い性質を持つとする主張について十分な論証がなされていない点、文法化理論などを応用した理論的な考察にも踏み込む必要がある点などの課題が指摘された。このようないくつかの課題を残すものの、「ていく」「てくる」「ている」を一つのセットで扱うことで三者の意味的な関係性や棲み分けについて従来にない知見を提示している点、「ていらっしゃる」において意味領域の縮小化が進んでおり、〈テイク〉〈テクル〉〈テイル〉のトリオとしての均衡が崩れている実態を明らかにしている点、日本語学の分野では

あまり試みられていないプログラミング言語を用いた実証的な分析により新たな方法論を開拓している点などについて、審査委員から高い評価が示された。本論文で示されている方法論は、他の言語現象にも幅広く適用可能であり、今後のさらなる研究の展開も期待される。

以上の見解から、審査員一同は本論文が博士の学位を授与されるにふさわしいものであると判定する。